

氏名 井原伸浩 (Nobuhiro Ihara)
職名 准教授
所属 情報学部情報学研究科グローバルメディア論講座
情報学研究科附属グローバルメディア研究センター
学位 (専攻分野) Ph.D. (Social and Political Sciences),
The University of Melbourne
メールアドレス ihara*i.nagoya-u.ac.jp (*を@に変更してください)
研究分野 国際政治史、アジア研究、国際機構論、
ポリティカルコミュニケーション
研究テーマ 国家間の政治的シグナル、日本のイメージ外交、
東南アジア外交史
所属学会 国際政治学会
日本マス・コミュニケーション学会
グローバル・ガバナンス学会



主要論文等 井原伸浩「ASEAN設立過程再考－原加盟国の対インドネシア不信に注目して－」
『国際政治』164, 115-128, 2011.
井原伸浩「設立当初のASEANは機能したか：インドネシアの域内影響力拡大を抑制する制度構造に注目して、1966-1968」『神戸法學雑誌』62(3/4), 99-128, 2013.
井原伸浩「サバ紛争とASEAN:紛争管理手法の採用過程、1968-69」『神戸法學雑誌』63(1), 141-169, 2013.
Nobuhiro Ihara, "Singapore's ASEAN Membership: A Focus on the Institutional Structure of Regional Cooperation, 1966-68," *Kobe Law Review*, Vol. 47, pp.51-78, 2014.
井原伸浩「1970年代東南アジアにおける日本の「経済支配」イメージの再検討」
『メディアと社会』8号, pp.1-16, 2016.
井原伸浩「1970年代の東南アジアにおける非経済的な日本イメージの悪化要因」
『言語文化論集』38(1), pp. 131-146, 2016.
広島市立大学平和研究所編『平和と安全保障を考える事典』法律文化社, 2016.
井原伸浩「福田ドクトリンとASEAN重視政策：望ましく有用な日本人のイメージを形成するために」中村登志哉編著『戦後70年を越えて：ドイツの選択・日本の関与』一藝社, pp. 53-73, 2016.

受賞歴 New Zealand Political Studies Association (NZPSA) Postgraduate Conference Paper Prize 2010, NZPSA, 2010.

自己紹介 博士課程では、相互に不信を抱える国家間の協力を実現・維持するために、いかなるシグナルが当該国家の政府間で送られるのか、というテーマを研究してきました。具体的な事例として、1960年代から70年代にかけての東南アジア諸国連合 (ASEAN: the Association of Southeast Asian Nations)史を扱い、それが今日の研究を基礎づけています。

現在は、1970年代の日本による対東南アジア外交史を研究しています。とりわけ70年代半ばに当該地域で強まっていた反日感情の緩和という課題に、日本政府をはじめとした種々のアクターが、どのような現地の調査活動を行い、誰が、いか

なる経緯で、どのような取り組みを発案・実施していたのかを、外交文書やインタビューを重ねることで明らかにしようとしています。分析に当たっては、私のこれまでの研究で用いた国家間シグナルの議論に加え、ASEAN諸国民の対日イメージを向上させる文化外交も研究の射程に加えています。

大学院の講義では、アジアにおけるパブリック・ディプロマシーに加え、権力、政治体制、プロパガンダおよびナショナリズムといったテーマを軸に、国際関係における情報発信の役割や在りかた、さらにはその変化について、政治学的、歴史的に議論します。

メッセージ

強い目的意識を持つ学生の入学を希望します。自分はどのようにして社会に貢献したいのか、そのためにどのような職に就きたいか、それにはどのような能力が必要なのか、そうした能力の習得や向上に大学院のプログラムは役に立つのか...これらを熟慮したうえで、大学院への進学を検討してください。

こうした目的意識がなければ、勉学や研究に熱意を持つことは難しいですし、その結果、大学院生活で得られるものも大きく減退してしまいます。修士論文の執筆を例にとると、強い目的意識や熱意をもって取り組む学生は、研究対象についての専門性を向上させる以上のものを、そこから得ることができます。というのも、論文の執筆過程では、研究対象の現状を把握して研究課題を発見・設定する能力や、研究を実施するうえでどのような作業をいかに進めるべきかを明確にする計画力、研究を実施する行動力、情報収集力、さらには研究成果の発信力を向上させる機会があるからです。また、学術的な引き出しを増やし、質の高い論文の執筆につながりやすくするために、自身の専門だけでなく、幅広く学際的に学ぶことも求められます。いうまでもなく、これらの能力や見識の広さは、皆さんが就職した後、社会人として必ず要求されます。

学べば学ぶほどわからないことばかりですが、熱意をもって研究し、多くの文献や資料に触れていけば、楽しい発見に巡り合う瞬間はきっとあります。ぜひ、学びに熱中することで、こうした研究の醍醐味に触れていただければ幸いです。私も、皆さんとの交流の中に、たくさんの発見があることを楽しみにしています。